映画監督

川崎ゆきお

「話すようなことじゃなかったんだが…」
　雨はまだ降り続いている。
「あの監督は撮り直しを言わない人だった」
　キャメラの岩田が続ける。
「そう言われれば、そんな感じですね」
　助監の星野が言う。
「演技指導もしなかったなあ。シナリオに書いてあるってね」
「役者さん、大変だったでしょ」
「自分なりに演じていたよ」
「それって、バラバラになるんじゃ…」
「だから、役者同士で相談してやってたよ」
「じゃあ、監督はいらないじゃないですか」
「いや、それがあの人の映画なんだよ」
「絵作りはどうしてたんです？」
「俺が本を見ながら、なんとなくセットしたよ」
「でも、一週間でよくできましたねえ」
「監督に下手なイメージさえなけりゃできるさ。フィルム代も安くつくしね」
「でも、どうしてあの人が監督に？」
「他にいなかったんだろ、適当な人が。長くテレビのドキュメンタリーやってた人でね。オーナーの同級生らしいよ」
「プロデューサーが一度も現場に来なかったらしいですね」
「大作かかえていたからね、あの人」
「監督とプロデューサーとの関係はどうだったんでしょう？」
「もめたという話は聞かないな」
「でもやっぱり現場で、撮り直しはあったでしょ？」
「キャメラ回してたの俺だからね」
「あったでしょ」
「気になるか？」
「はい」
「俺が撮り直した」
「やっぱり」
「台詞間違えて、素に戻ってニヤニヤしてるんだよ。芝居にならんでしょ」
「そのとき、監督は？」
「オーケイだった」
「ひどい」
「俺がキャメラ故障したからって、撮り直した」
「そのシーン、見たかったですよ」
「全編そうじゃないか」
「ですね」
「あとで編集しても、どうにもならんゲージュツ映画だよ」
「でもプロデューサーがカンヌに出したんでしょ」
「それで特別賞だよ」

雨が止んだのか、二人は立ち上がった。

　　了